

大垣藩と戸田氏

◆譜代大名戸田氏大垣藩

大垣戸田家は、三河以来の徳川氏の家臣で、徳川家とのつながりは深く、藩祖戸田一西は、家康の関東入国により、武蔵国鯨井(現在の埼玉県川越市)に5千石の領地を与えられました。慶長6年(1601)、近江国膳所(現在の滋賀県大津市)に家康より築城を命じられ、3万石の大名となり、戸田家の礎を築きました。



初代戸田氏鉄公(郷土館蔵)

その子氏鉄は、家康の近習として仕え、慶長元年(1596)に家康の姪にあたる諷姫を妻とし、同5年には関ヶ原合戦に参加しました。同7年には膳所の領地を継ぎ、元和2年(1616)、2万石の加増を受け、摂津国尼崎(現在の兵庫県尼崎市)5万石に移封されました。寛永12年(1635)、さらに5万石の加増を受け、大垣10万石の藩主となり、以後、戸田氏は明治に至るまで11代に及び、この地を治めました。

◆初代大垣藩主戸田氏鉄

摂津国尼崎の領主であった氏鉄は、尼崎における治水事業の手腕が認められ、寛永12年(1635)、美濃国大垣藩の藩主となりました。大垣に入ると、領民を治めるための法令を整備し、荒地を調査し開墾を奨励することで、1万石余りの新田を開発し、藩財政を強固にしました。治水が大切な大垣において、山林の乱伐禁止や植林による山地の保水を図り、洪水時の河川からの逆水を防ぐため、水門川川口付近に門樋を築造するなど、治山治水事業を行いました。

また、政務の中心となる大垣城郭及び城下町の整備を行い、大垣藩政の基礎を固めました。

学問にも精通していた氏鉄は、君主と臣下のありかたや学問の大切さを『八道集』『四角文集』などに著しました。この考えは、歴代藩主にも受け継がれ、文教のまち大垣の礎を築くことになりました。



戸田氏鉄騎馬像と大垣城

◆第8代大垣藩主戸田氏庸

氏庸は、文化3年(1806)、父である第7代藩主氏教の跡を継ぎ、第8代藩主となりました。蹴鞠や鷹狩りを行い、狩野派の流れを汲む本格的な絵を描くなど、多趣味であり文武両道に優れた藩主でした。氏庸は、家臣の屋敷を教場として儒学の講義をさせ、天保9年(1838)には学問所を設置しました。これが藩校のはじまりといわれ、同11年には、幕府の許可を得て大垣城辰ノ口門の外(現在の東外側町保健センター周辺)に学舎を創建しました。最初は学問所と称していましたが、後に「致道館」そして「敬教堂」と称しました。藩校では、儒学をはじめ、算術や洋学、兵学など、さまざまな教科が教えられました。

◆第11代大垣藩主戸田氏共

氏共は、慶応元年(1865)、病没した兄である第10代藩主氏彬の跡を継ぎ、12歳で第11代藩主となりました。同4年、鳥羽伏見の戦いを境に勤王へと藩論を統一し、朝廷へ忠誠を誓い、大垣藩は戊辰戦争の先鋒軍として出陣しました。明治2年(1869)版籍を奉還し、氏共は大垣藩知事に任命されましたが、同3年、勉学のため上京し、大学南校(現在の東京大学)へ入学しました。同4年、岩倉具視の長女極子と結婚し、藩知事を辞任し、アメリカへと留学します。同20年オーストリア特命全権公使に任命され、外交官として活躍しました。同23年に帰国後、大正10年(1921)まで、宮内省において式部長官などの職務を務めました。昭和11年(1936)83歳で亡くなりました。



戸田氏共肖像写真(大垣市立図書館蔵)

戸田氏歴代大垣藩主一覽

- 〈初代〉 氏鉄
- 〈第2代〉 氏信
- 〈第3代〉 氏西
- 〈第4代〉 氏定
- 〈第5代〉 氏長
- 〈第6代〉 氏英
- 〈第7代〉 氏教
- 〈第8代〉 氏庸
- 〈第9代〉 氏正
- 〈第10代〉 氏彬
- 〈第11代〉 氏共

水と城の大垣 大垣城

◆大垣城の沿革

大垣城は、天文4年(1535)宮川安定により築城されました。(明応9年(1500)に竹腰尚綱が築城したという説もあります。)水門川の流れを外堀に利用した、規模の小さな城でした。その後、氏家ト全が城主の頃に城の土塁を高くするとともに堀を深くし、慶長元年(1596)には伊藤祐盛によって天守が造営されました。同5年の関ヶ原合戦の時、戦場になりましたが、元和6年(1620)に松平忠良によって改築が行われました。天守は四層四階、石垣には地元赤坂の石灰岩が使われていました。そして、寛永12年(1635)以降、江戸時代を通じて戸田氏の城下町の中心としてそびえました。明治9年(1876)に、旧城郭本丸は中学校建設予定地として下げ渡しとなり、その後は大垣公園として整備されました。昭和11年(1936)には、国宝に指定され、郷土博物館として親しまれましたが、同20年7月29日の空襲で焼失しました。戦後の復興の中で、大垣城再建の気運が高まり、昭和34年には昔の大垣城の姿で再建されました。さらに、平成23年(2011)には、天守と乾隅櫓を震災前の外観に近づける改修が行われました。

◆大垣城の構造

大垣城の絵図は数多く残されており、大垣城全体の様子がよくわかります。本丸と二の丸が並んで配置され、本丸へは廊下橋だけでつながっていました。この本丸・二の丸の南方に三の丸がありました。江戸時代には当初、二の丸で政務を行っていましたが、17世紀後半に二の丸御殿が大破したことから、以後は三の丸御殿で政務を行いました。堀は、本丸西が三重で、東は四重になっていました。内堀の幅はおおよそ24×36m、深さは2.7×4.5mありました。これらは明治時代以後に徐々に埋め立てられ、現在では外堀が水門川や牛屋川として残っているのみです。また、大垣城下を美濃路が通っており、本陣、脇本陣もありました。城下南西の船町には湊があり、水門川や揖斐川の水運により桑名へとつながっていました。



戦前の国宝大垣城(大垣市立図書館蔵)

◆関ヶ原合戦と大垣城

関ヶ原合戦において、大垣城は重要な働きをしました。慶長5年(1600)石田三成ら豊臣方の西軍は、徳川家康を討つため美濃に入りました。その時の大垣城主は豊臣の家臣、伊藤盛宗(盛正ともいう)でした。三成は大垣城に入城して西軍の本拠とし、付近の村や西方の南宮山にかけて諸將に陣をはらせました。ところが、東軍が美濃の諸城を攻略して、予想外に早く西北の赤坂岡山を中心にして布陣したため、西軍は大きく動揺しました。合戦前日の9月14日、三成の謀將・島左近はこれを救うため、一計を案じて岡山の東で東軍の一部を誘い出しました。左近は南一色の地に伏兵を忍ばせておいて攻撃したので、作戦は成功して勝利を得ることができました。これは「杭瀬川の戦い」と呼ばれています。

この戦いにより、一時は西軍の士気があがりました。やがて、西軍は家康の作戦にのせられ、関ヶ原方面へと移動し、大垣城には榑原長亮ら兵7500人が残りました。翌15日には、関ヶ原で合戦が行われ東軍の勝利で終わります。その後も大垣城では攻防戦が続きますが、城内での裏切りが出るなどして、23日には開城しました。なお、大垣城の1階には杭瀬川の戦いのジオラマがあり、天守石垣西には「おあむ物語」にちなむ、おあむの松があります。



おあむの松

◆治水と大垣

「水の都・大垣」といわれますが、西美濃の輪中地帯では、昔から水との闘いに明け暮れていました。江戸時代には慶安3年(1650)、戸田氏の初代である氏鉄の頃に起きた「慶安寅年の大水」が洪水史上でも大規模な災害でした。大垣城下のほとんどの家屋が水没、水深は約2.4m、死者は町家で1153人、村では1553人、潰れ家は2806戸でした。その後またたび洪水に見舞われ、特に明治29年(1896)の水害では、大垣城の天守石垣までも浸水しました。現在、天守石垣西には明治二十九年大洪水点という石碑が建てられ、石垣には治水に尽力した金森吉次郎が刻んだといわれる洪水位のラインを見ることができ、銅像も建てられています。

大垣城天守
明治29年の洪水位のラインと石碑

